



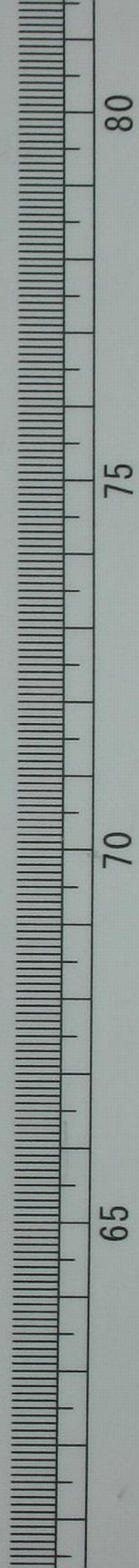
通俗

日本小史

渡邊義方編輯

第初編

上



4557

染山延房檢閱

渡邊文京探觚

梅堂國政畫

通 俗 日本小史

東京書肆 金松堂發兌

通日本小史初編の序詞

凡そ事を託るに洩さずとまれを煩わしく省けばまゝ要領失ふ
 煩簡よく其度と適ひ終始本末をの宜しきを得んとしつと成るがた
 業よりて博學多才の人其能を余元來才なく學なく浅き硯の海
 原より三本たらしぬ命毛の短うた筆かて拮据くと漁る趣向も又爰も古
 き紙温わく新しく古今の盛衰治乱得失三日見ぬ間の櫻木又上老倭
 の小歴史今流行の合巻て牽強附會比喩方便巧よりのて童幼婦
 女子は媚と嚙ぐの類よりねむか口は苦いありねども古今又通
 びる大妙業史学に入るの門よりて高き昇る階段一段たひあ
 書を編む後正史と讀たまはる思ひ半又過る保証と已が田へ
 引く勝手な放言この亦附會の説とや

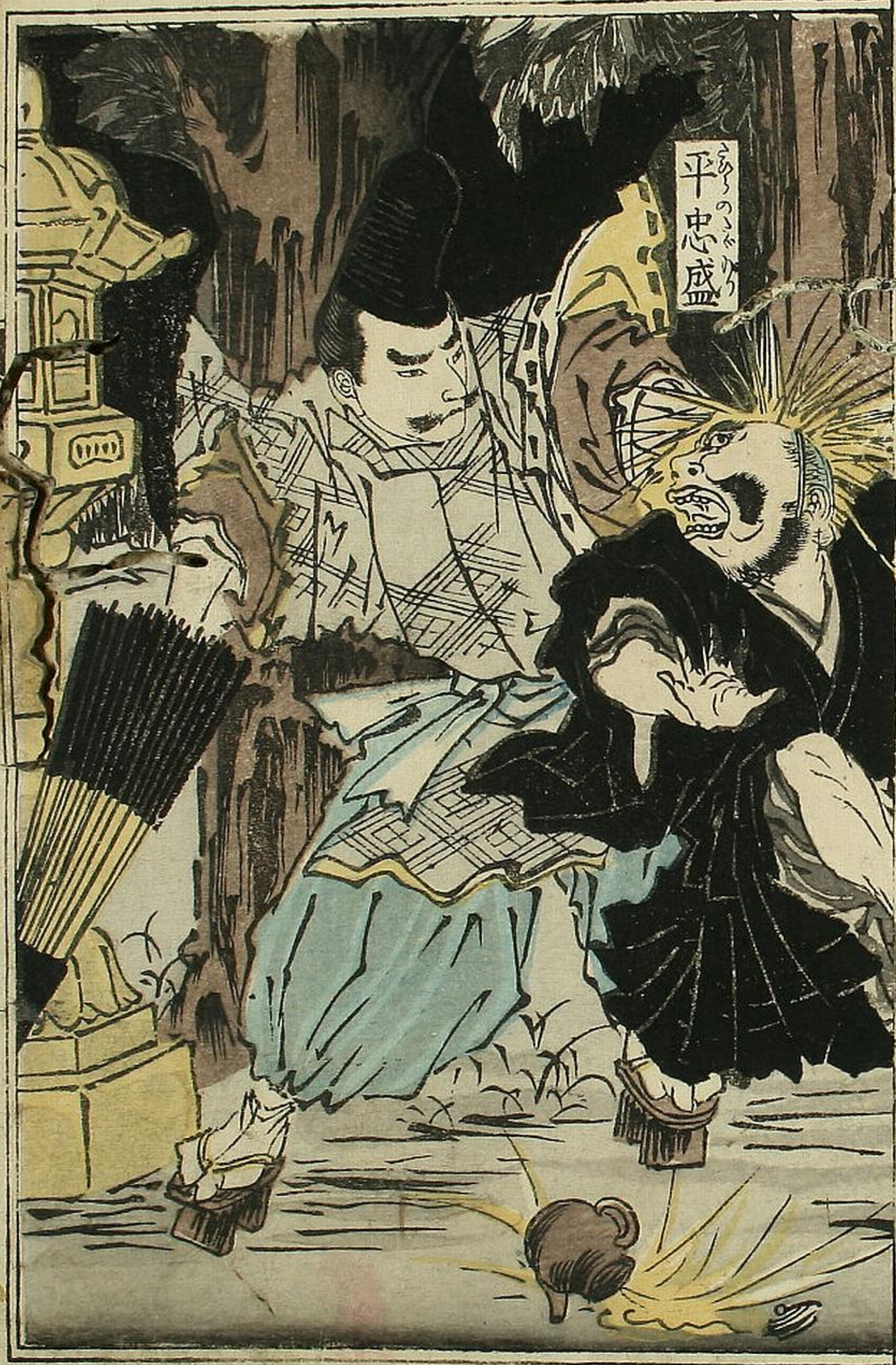
明治十四年三月吉日

代作屋の主個

渡邊文京記而

日本小史

48-8432





小松内大臣平重盛の肖像



八幡太郎源義家

上の巻

平将門不軌と企て干戈と動きて天慶の乱は起り
 源頼義義家奥羽征伐前九年後三年の役より
 両帝國を争ふ保元の乱は畢る

下の巻

骨肉相食む平治の乱は起り源平盛衰治
 乱の沿革世運の變遷頼朝牛若の成長より
 清盛の驕奢を極むるまで畢る

通俗 日本小史初編之上

東京

渡邊文京操觚

人皇七十三代朱雀天皇の御宇天慶元年春二月下總
 の人平将門其叔父なる常陸の大掾平國香と攻殺し
 下總の相馬を拠て謀叛と企てたるその起源を尋
 ねるに其初將門撰政藤原忠平に依頼て檢非違使の
 職に任ぜらるると請うと強暴無残の白漢なれば
 忠平更に取合ぬ將門心は憤り爰に至りて不軌を
 企てて帝位を覬ふを不敵なる同氣求むる兇徒の首

謀者武藏守興世王なる人將門を説て曰るや夫関
八州の地たる實は日本の咽喉なれば天下は大業を
企つる根拠となさへ屈竟一一州を取るも八州を取
るも事敗るるの日は至らば誅せらるるの罪一なり
公何とよ決したまふと悪を助けて教唆を詞は將門
力を得て勢ひまほしく盛んとなり遂は下野上野を掠
奪し尋て武藏相摸を犯す國香の子平貞盛は此時京
師に在けるが父討とくと聞よりは何らへの猶
豫すべき奏上ふべき暇もふく手勢僅くは引卒し

て供不戴天の父の仇叛賊將門を誅戮せしと官を棄て
東国に下る將門早くも窺ひ知り信濃路は兵を出して
貞盛を要撃すをぞ衆寡敵せぬのみありは不意に
出たる事なるとはと散々討たされ貞盛幸くは圍
を斬抜け僅は身と脱して京師に帰り將門を討つ
勅旨を奉り錦旗を捧げて攻撃なさんと其旨朝廷に
奏請したり將門初め京師に在り日藤原純友あり者
と深く交誼を結びたる時俱は比叡山に昇り俯て皇
城と瞰し絶友に向ひ云るや我他日志しと得て帝

位と踐むの日は至らば公へ我関白とるり宜しく補
佐し給はるべしと爰は謀叛の臍と固め此時恰りも
純友へ伊豫掾とて任地と在りて將門が叛旗を翻へ
まと門より自ら海賊の巨魁とかり悪漢兇徒を召集
して南海山陽の二道を劫りて以て遙ろは將門は應
じ潘りふ人城京師に遣はし火を洛中の市街に放ち
人の心を騒がせしぞ京師の騒動大方ありて人心為
は恟々たり案下休題爰はまご下野の押領使藤原秀
郷るる者より依藤太と稱し武畧勇敢衆は勝は當時

屈指の英傑とて將門兵を起まると聞き直は往て見え
し此時將門髪を梳ぶて在りて豫て秀郷の英名と聞
知るや名是へ善き軍師の來臨とと取物も取敢て髻
を捉りて俛して出迎へ一間に請ひて厚く饗應し膳
部と勸めて主客俱に箸と上りて將門椀よりて飯
粒前は溢し墮しを周章拾ひて之を食ふ秀郷夫を打
見やり其挙動輕卒よりて與ふ事を謀るは足おと忽
地心は尋思しつ辭し去つて貞盛は帰順し討賊の先
鋒とありたりける云程は其年由暮て明はば天慶二

日本書紀 卷之...

五

五

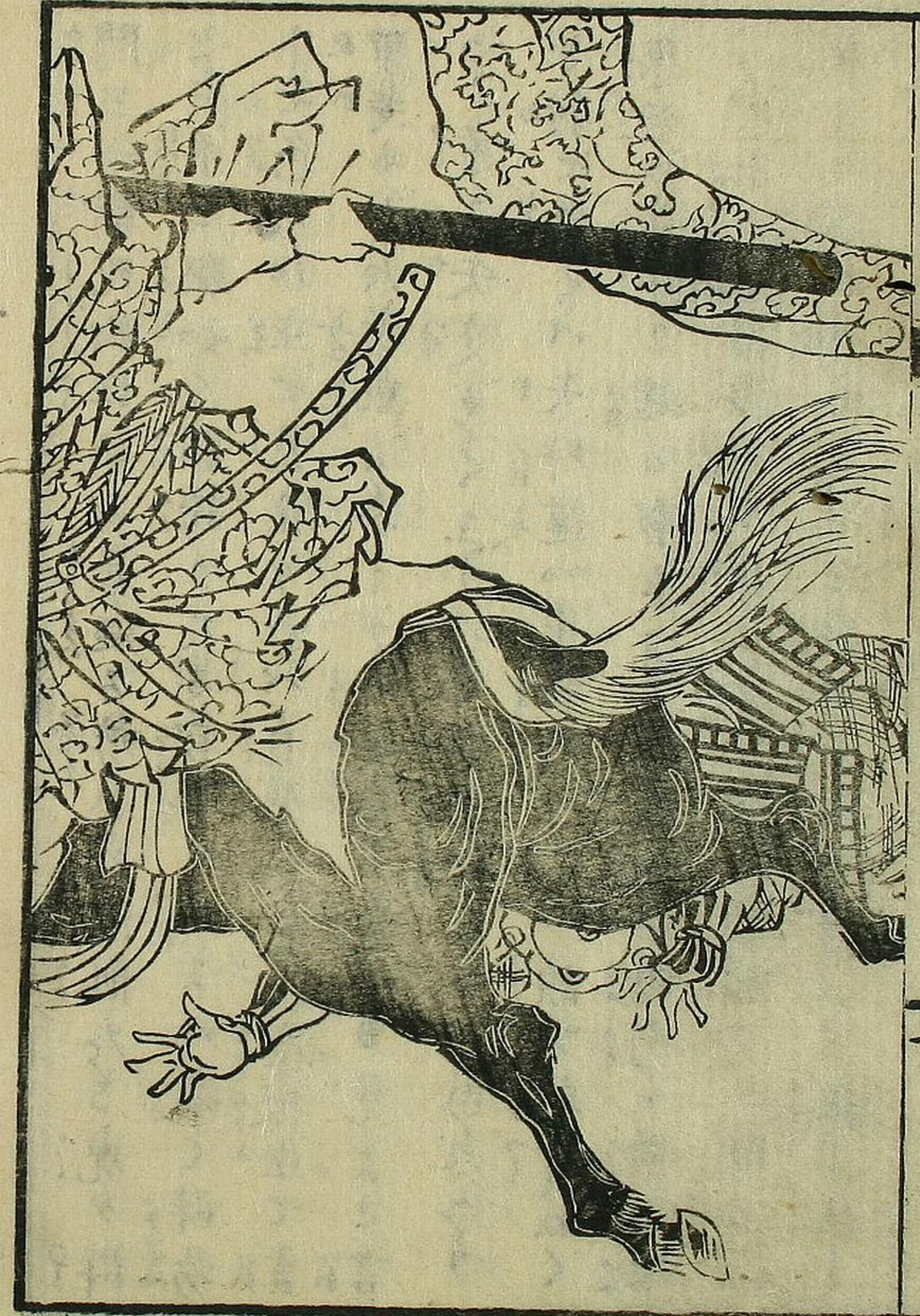
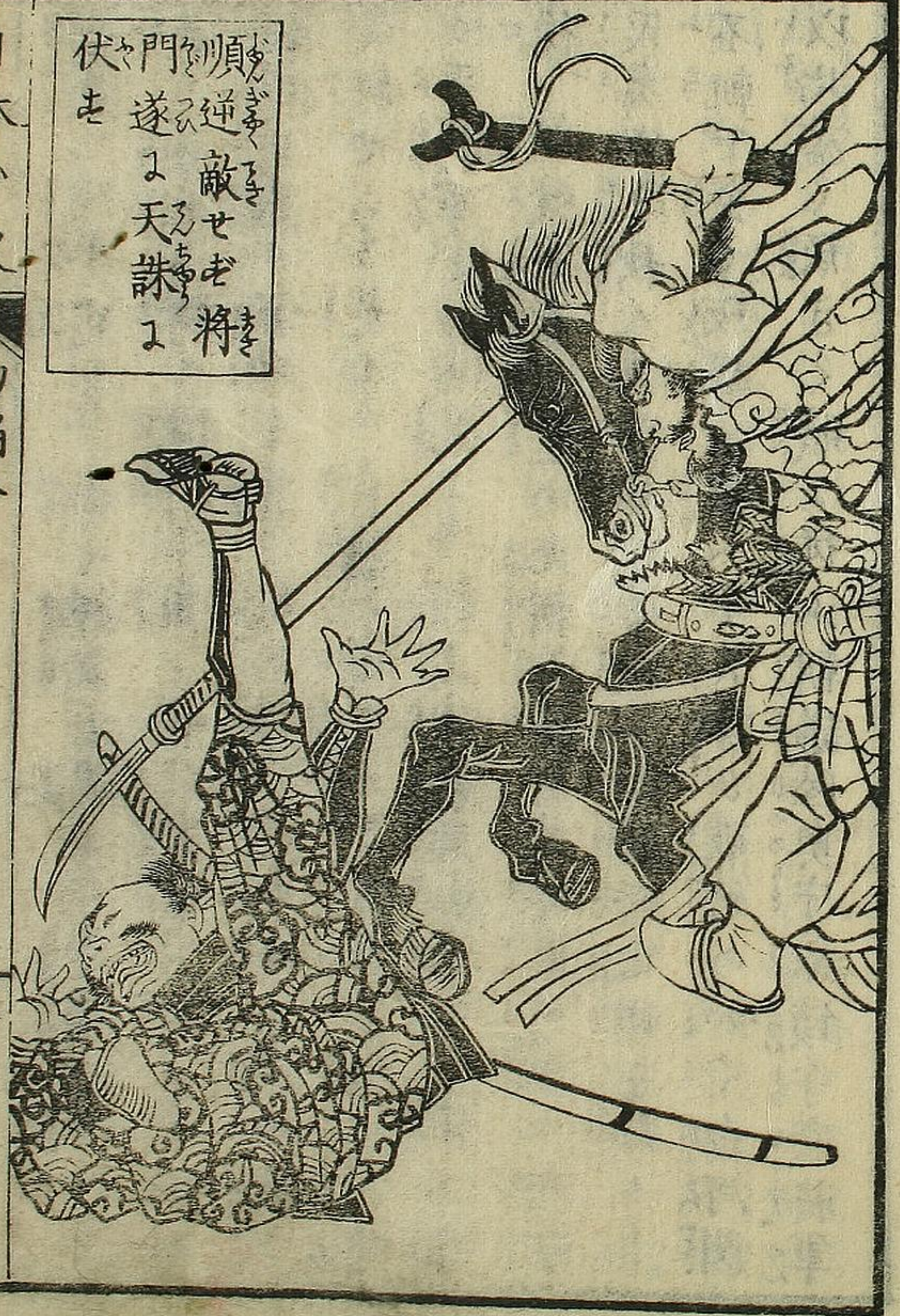
年の春朝延討賊の廟議を定め参議藤原忠文を拜し
て征東大將軍とす。貞盛を常陸掾と任し秀郷と諸
共は兵と率て進撃する。貞盛は昔日失敗の
耻辱を雪ぐんと急ぎふ急いで兵を進め將門が備え
るまき坂窺ひ四千余人の逞兵と合せ一度は動と襲ひ
蒐む。賊軍大に狼狽して右往左往に敗走る。其得
たりと進む官軍勢順逆如何に敵し得ん賊軍防ぐを
を得ぬ。或ひは討て或ひは逃失せ烏合勢の悲しき
風は残雪の群千鳥むくくパツと散乱るを中あを將

門只一騎死物狂ひ暴廻る勢ひ宛然飢たる虎が群
ぐる羊と驅如く勝誇りたる官軍も此は痛く辟易
して色めたる立て見えれば貞盛怒る聲振立て言
甲斐もたれ拳動らふ。イデ我矢先を受ても見よと言
つ。弓は矢交えさきうくと牽絞りのツひたつ
と射て放る。矢坪違ひを將門が右の額を射貫ぬく
急所の痛手は堪る。ぬきさしも強勇の將門も鞍は堪
らぬ。真逆様頭轉倒と落る処と透さば駈寄る秀郷が
疾くも首を搔たりける。興世王以下悉く誅し伏し

日本書紀 卷之六十一 神皇正統記 卷之六十一

二

順逆敵世將
門遂天誅
伏在



関東八州平定せり尋て純友を夷らる皆頭を京師に
送り梟木に掛て獄門に梟し聖代安泰に治まりける
朝廷貞盛が軍功を賞し従五位下より秀郷を従四位下
に叙せらる是より貞盛の威名天下に轟き世の人呼
で平將軍といふ是より村上冷泉圓融花山一條三條
後一條後朱雀天皇の九朝を経て後冷泉天皇の御宇
天喜四年秋八月陸奥の豪族安部頼時近國を劫り
不軌を企て叛旗を翻へて其勢ひ破竹の如く白河関
以北盡く叛き賊に從ふ朝議陸奥守兼鎮守府將軍

源頼義の勅し頼時を討しむるも源氏ハ清和天
皇の御子貞純親王より出で親王の御子と六孫王経基
とよび初め姓を源氏と賜ひ子孫世々武臣たり経
基の子満仲満仲の長子を頼光といふ材武人し勝れ弟頼
信と供し英名當時より裏きたりある時頼光兇賊鬼同
丸を搦め捕り繋ぐに鉄鎖を以てて慄奸無雙の鬼同
丸深くも頼光を怨む其夜鉄鎖を断切り獄舎を
破つて逃れ出で翌朝鞍馬に往と聞き路よて頼光を
狙撃んと野牛を殺し身を其間に潜し待伏まり

在たる折々細公時定道季武の四勇臣を將てかの
 原野よかりつ頼光路傍の斃牛ふキツと目を注け
 此内よらそ曲漢ありあは射止よと下知の下心得
 りと季武が持たる弓ふ矢交へる斃と一牛を射り
 一ふ案ふ違へぬ鬼同丸双を揮つて跳り出で頼光目
 鬼て飛蒐るを問え留むる従士の面々多勢ふ屈せぬ
 大膽不敵妨げまると突退蹴退け間近く逼りて撃つ
 太刀と頼光騒がせや暫く彼方此方へ遣違はせや
 ツと掛たふ大喝一声抜手も見せぬ抜撃ふ鬼同丸が

首を撃落し神色自若なるは見て人其勇武ふ服せし
 とぞ其子頼義も又父ふ劣らぬ英傑よて山野ふ遊獵
 まるしは好む常ふ弱き子を用ひ猛獸を射殪まこと
 弦音ふ應むる神のごく平直方其材藝と愛し我女は
 頼義ふ妻せしふらる夜頼義八幡神劍を授け賜ふと
 夢と間もふく妻も妊身し月満日過て分娩せしは男
 子なり頼義の喜び大方ありぞ此兒必は家を興さん
 と仍て名は義家と命ト成人ふ及びて八幡祠前ふ元
 服し八幡太郎と稱す其性剛毅沈断射る事ふ妙と得

て此父よりして此子有り未頼母き大將よと四方の豪傑心を寄せ争つて帰服せり却つて説頼光へ叛賊頼時追討の勅命を受け陸奥守に任せらるるのバ子の義家義綱と共に兵を率めて陸奥の國へと進發せしが此年大赦を行われ罪ある者も赦さると聞き歸順の心を起せしり或る頼義の威名は怖ましり頼時兵を解散し戦はばして降伏せし後春と過ぎ秋と暮て永承七年頼義に任期既満兵を率て京師に復らんと阿栗川といへる処に宿陣を其夜さり官

軍の別隊藤原光貞の營に襲ふ者有り事の起源を尋ぬるに頼時の子貞任光貞の娘に懸想し妻に娶らんこと成言入し光貞之を聞入ぬを深く遺恨に思ひつかり騷動し及びしふり是に於て頼義に貞任を執へて刑に處せんとせしりやを焼野の雉子夜の鶴子ゆゑに迷ふ親心頼時も又大に怒り遂に兵を擧て叛き夜川関に拠る是に捨置むと頼義ハ夫々官軍と部署を以て進撃の準備をなすしつを頼時の一族富忠とて奥羽有名の豪族と説き論を以て順逆の理を以てし

遂に官軍の應ぜしむ斯とも知らぬ頼時を富忠と我
 味方より引入んと度々往て説を窺ひそつ途は兵を伏
 せ容易頼時を擒ふし首を刎て誅せられど尚も屈せ
 ぬ其子貞任賊炎まほしく熾ふり是より戦争止時なく
 歳生憎飢饉して五穀曾て實らぬを官軍糧乏しく
 戦争志をく利を失ふ大に困苦と極めたり頃
 天喜五年十一月頼義自より兵二千を將として貞任
 を河崎に撃つ時恰も霜月の名を負ふ寒國の事なれ
 を万字巴と降る雪ハ甲の上より肌は透り鉄は冷て

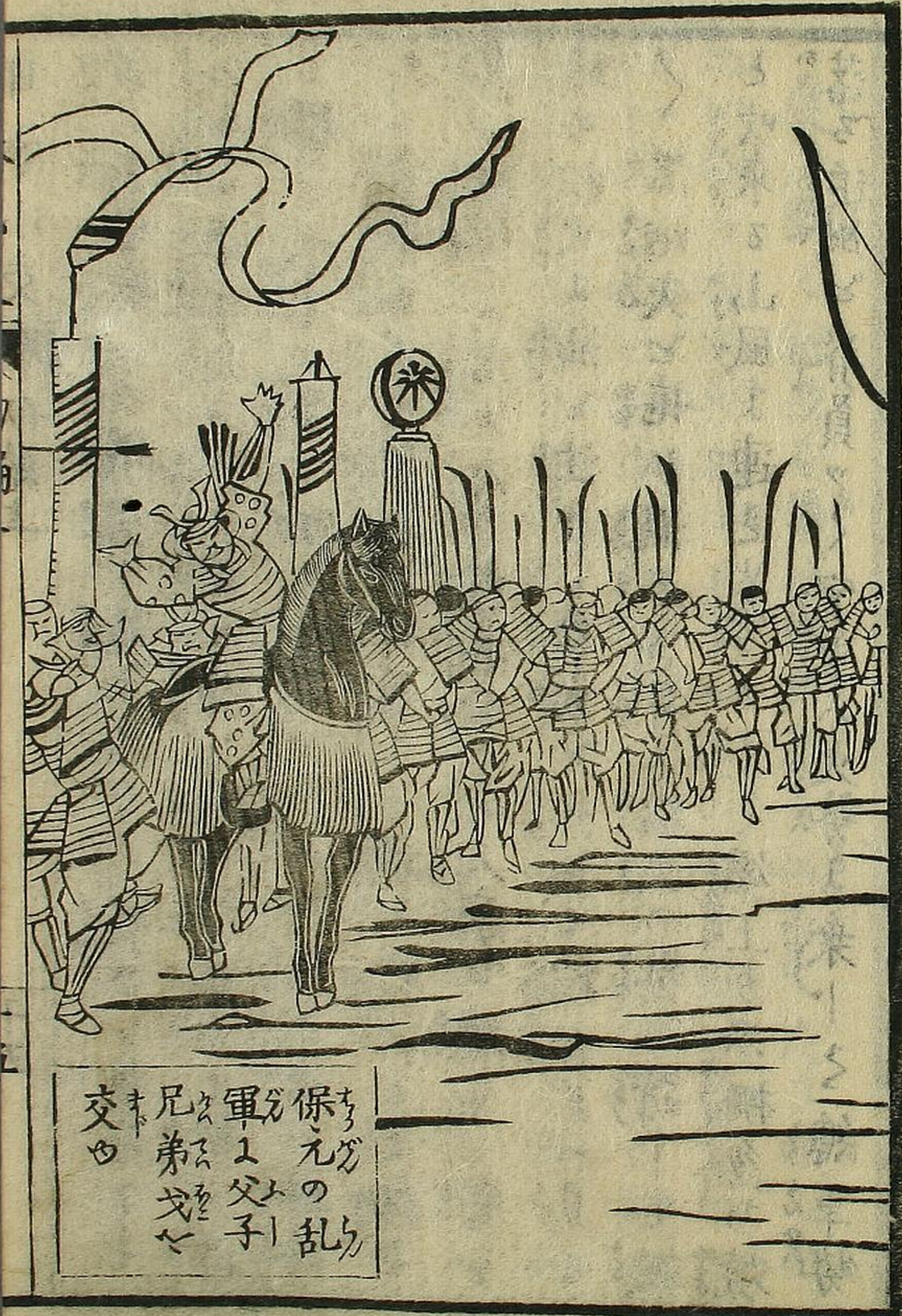
氷の如く人馬俱に飢凍え進退自由ありざるは賊の
 寒地より人と成り寒氣は屈せぬ猛勢鋭どく貞任遣兵
 四千を以て我軍を攻蒐り無二無三は突崩を官軍剛
 ならずざるは非ざれど既前も云如く寒氣は閉ら
 ば充分に働らく事の成ざるは賊の得たりと勝を乘
 り縦横無下は斬入たり暫しが間の支えしりと官軍
 遂に敗走し戦死を少なるを残兵僅かに六騎
 のみ敵より射蒐る矢玉の雨の注ぐが如く頼義義家
 皆馬を乗潰し父子齊しく徒跣足中少を義家跋巡る

憎うた賊の挙動うふ目は物見せんと敦圍つ群る
 賊軍の真中へ藤原の範明等と主従僅よ七八人面も
 振を突入たり賊兵是と見るよりハ幡太郎来りぞ
 と互ひに警め恐を其まき退き去りされを此方の
 容易圍を斬抜け危急を免る事を得たり頼義此旨
 京師へ奏し兵糧を廻漕さると成請ひ空しく時日
 を送るのみ兩軍相持し戦うを怠まると數年
 及へど糧米嘗て来らねば頼義説客として出羽
 の首長清原光頼及び弟武則は大義名分を説き官軍

應ぜしむ光頼兄弟悟る所やりのん康平五年七
 月武則自ら子弟以下萬餘人を率て至る是は於て頼
 義ハ營岡と云る地は本陣と置き兵を分ちて七陣と
 し武則義家等とし分ちて之は將としめ而して
 頼義ハ自ら第五陣を將とし直に進んで小松の賊砦
 逼り前日の耻を雪めんと怒り立たる寄手の勢ひ
 忽地砦を攻取なれど賊將貞任を智り者也名義宗
 任を遣はし之官軍の糧道を遮り断んとはかくと知
 たる頼義ハ兵を分ち之は向をしめ嘗て一步も退

のぞ貞任又我兵の寡き成窺ひ精騎八千を以て米り
襲ふ武則策と建て曰く我ら客兵より糧食乏し速
くは戦へば必ぞ勝ん坐して我を苦しめ却つて来
り戦ふは彼自ら死地に入りと勇立たる勇將の詞
より有理と頼義へ長蛇の陣を張て逆戦ふと半日餘
り遂に賊を打破り北るを追て磐井川に至り此凶賊
拔さむ討取らんと其夜武則をして八百騎を率めて
追討しむ武則更に死士五十人を撰び間道より進ん
で敵の背後より出で貞任が陣營に火を放ち烟りの上

る夜暗号として大手搦手一同に動と喚い合撃する
まあぞ賊軍防ぎ術もまく走りて衣川の嶮に拠り爰
より官軍と啖留めたり先頃より降續く連日連
夜の霖雨は河水方々漲りて石籠を洗ふ激流と事と
ゆせざる官軍は泳ぎ渡りて賊陣へ火を放ち烟りの
下をかり潜り白刃を抜連を逼り撃ち遂に貞任を追
走らせ進んで鳥海の賊砦を抜き篝火を焼て陣中
夜宴を張て將士を勵まし英氣を養ひ立上る殺氣凜
々四方を拂ひ勇ましくを又目醒しうき其翌日官



保元の乱
 父子
 兄弟
 交也



日本書紀
 初編上

軍の尚も厨川の賊砦に逼り去をく戦いと挑むるぞ
 此砦の要害なる水に依て壘を高く築き立て塹と深
 く鑿て水中に刃を植て必死と極めて守り居る勝誇
 たる官軍も去の要害を辟易して進み戦ふこと能
 甚が攻撃も苦となり頼義令して人家を壊ちて塹を
 填め松火と油と注ぎりけ火を放ちて投付は見る
 く黒烟天を掩ひ渦巻き昇る猛火の勢ひ折しも颯
 と吹来る山風も連は炎々として燃上り壘柵忽ち焼
 落る追風と脊負つて官軍へ火勢も乗ドる總軍勢

一度も動と鯨波を揚げ短兵急攻たてたり賊も必
 死と極りつ互ひは一步も退ぞうを撃つ撃つ入
 乱血の流して涿鹿の野草を染ぬ一屍ハ積で累々
 なるつと毛烈しき修羅闘場鬼を欺く貞任も順も又
 向ふ術もなかく勢ひ盡て今ハ早是までありとや思ひ
 ろん悪鬼羅刹の暴たる如く馬を蹴立て只一騎群る
 官軍の中央へ面も振ぎ突て入り右往左往も暴廻る
 を夫逃むる撃取と遂に官軍も生捕る頼義その罪を
 責て頭を刎ね弟宗任以下皆降り奥羽全くと鎮静せ

一、うぶ朝廷その功を賞し頼義を伊豫守に義家を
 出羽守に清原武則を鎮守府將軍に任ぜしむる世之
 を前九年の役とりしかる宗任以下降伏したる
 賊徒の各々罪の輕重に依り皆流刑に處せしむれど
 中よ義家の深く宗任の勇を愛し為し請ふる
 罪を宥め家僕とふして親任ししる夜義家の車
 に乗り宗任一人を従へえり私に通ぶる妾許し通
 ふ千鳥の戀衣宗任心と思ふやう父兄の仇を報ゆる
 此時るりとうち點頭き刀を拔く車中を窺ふよ

斯とも知らぬ義家への心地快氣に熟睡する其膽略
 の非凡ありと人を信ぜるとの深き感に遂に心を傾
 けて無二の腹臣とありしとを義家嘗て藤原頼通が第
 を訪ひ談偶々陸奥の軍事に及ぶ此時博士大江匡房
 別間も在て之を聞き獨言して囁くやう適晴なる良
 將なれど惜むるく未だ兵法を知らざると再度三回教
 息せしと義家聞て大に愧ぢ匡房も就て學び兵法の
 蓋莫と究めたりとをしかけて又後三條白河天皇の二朝
 を経て堀河天皇の御宇とありぬ是より先頼義を病

で卒き義家尋で陸奥守に任ぜらるる初め清原武則二
 個の子あり武貞武衡とり武貞は三個の子あり嫡子と
 真衡とつひ次を家衡清衡とり乱るる世の習慣とく
 動ともそれを骨肉相食と兄弟牆に閱き世嗣を争
 ふ事より一と家衡の清衡と俱に兵を起し其叔父吉
 彦秀武を語らひ真衡と戈を交え兄は抗敵ふ無名の
 師義家陸奥に來ると聞き真衡大に喜び之を應援
 を請しうば義家異儀なく承諾之寛治元年秋九月自
 ろり數萬騎を將として家衡等が楯籠る金澤の柵へ

と進撃を柵を離るる數十丁此方の原野を行軍を
 ま折空を飛行く雁金の俄に列の乱と一は是必を伏
 兵のうん油断なせると義家が指揮あり兵を縦ち
 傍の草叢と搜索る其思ふ違ふ敵の伏兵発見さ
 せしと知るものうら撃て出る何の苦もく一人も餘
 さば撃取たり義家衆は云るやう兵法は言るやう鳥乱
 る者へ伏るありと我学をざれば不覺と取り危うな
 場所を臨むべきと遂に進んで柵を圍む寄手の先
 鋒鎌倉權五郎景政ある者頗る挑む戦ひし敵の強

將鳥海弥三郎と名乗つ同ドク駒と騎出— 靦定めく
 飄と放つ矢坪違をば景政が右の眼と射貫く萬夫不
 當の景政へ疾手は屈せを立る箭と抜ぎと其終弥三
 郎と逐つ廻—の逐詰て即座は當の敵と射止め馬より
 礎と墮る處を細頸下と撃落— 又先深く刺貫き群
 り蒐る敵兵と突退け蹴退け薙倒— 人無境を行如く味
 方の陣は立戻りかの箭と抜取り憇— 比類稀る荒武
 者あり案下休題爰は又義家の弟新羅三郎義光の兄
 の援と為さんとて京師と出て陸奥は下り兄義家と兵を

合せ日毎は敵の柵を攻むれど敵もも必死と究め奮
 戦ありて防ぐや容易く攻抜と能はば義家將士を励
 まはたり會食する度毎は勇隊怯隊の二列を設け戦
 功の甲乙と定むるふぞ義光の從臣腰秀方日と— 勇
 隊は列せざるなく其働きも抜群あり去程は寄手は持久
 の策を建て兵糧攻よるさんとて義家諸軍は令と傳へ長
 圍と築きて圍むのを敢て戦争と挑まねば敵軍進退谷り
 りて又如何とを詮術なく居ると數旬柵中糧食既は盡
 きるは是迄と柵は火を掛烟は紛して或は逃失せ或は降

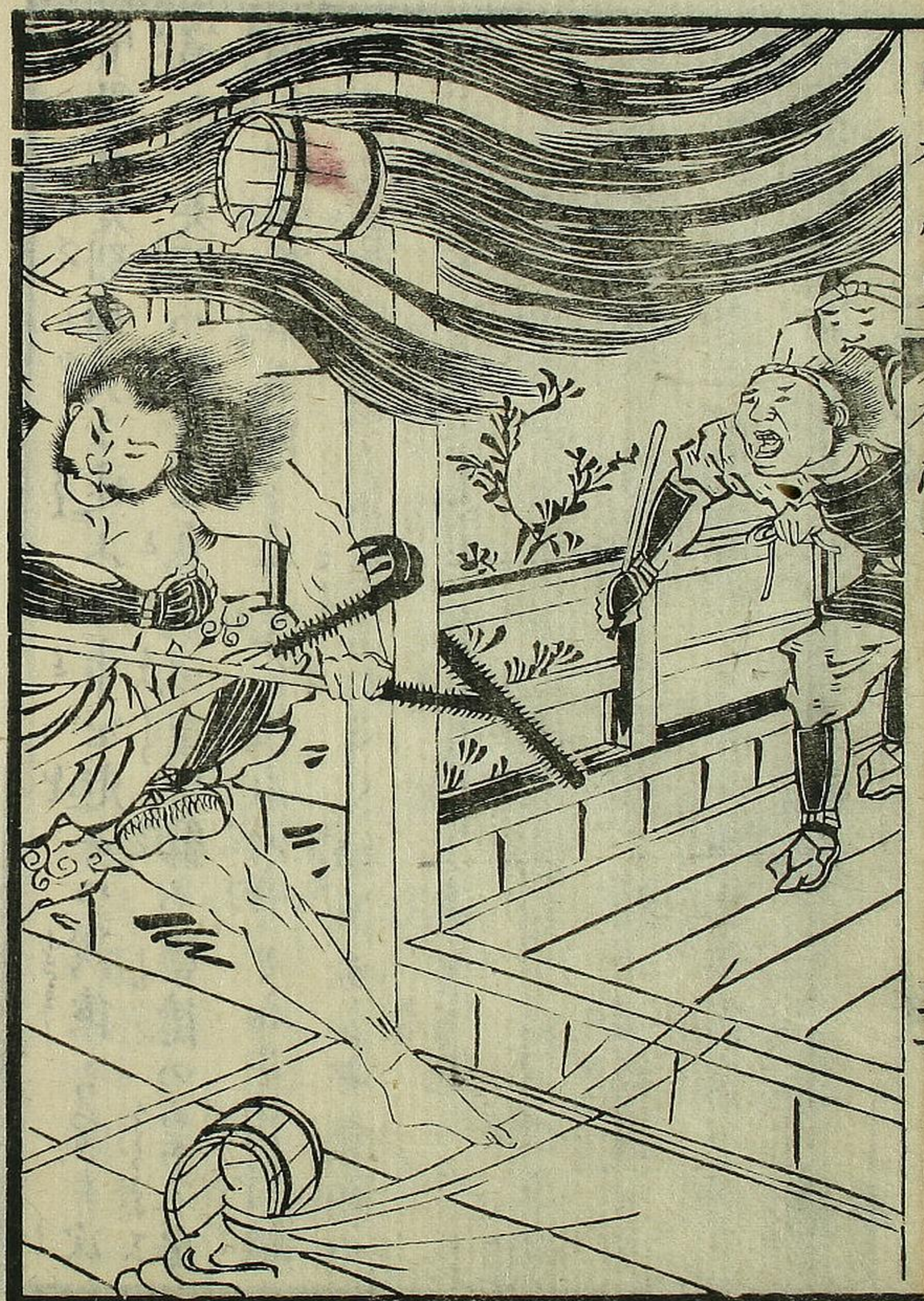
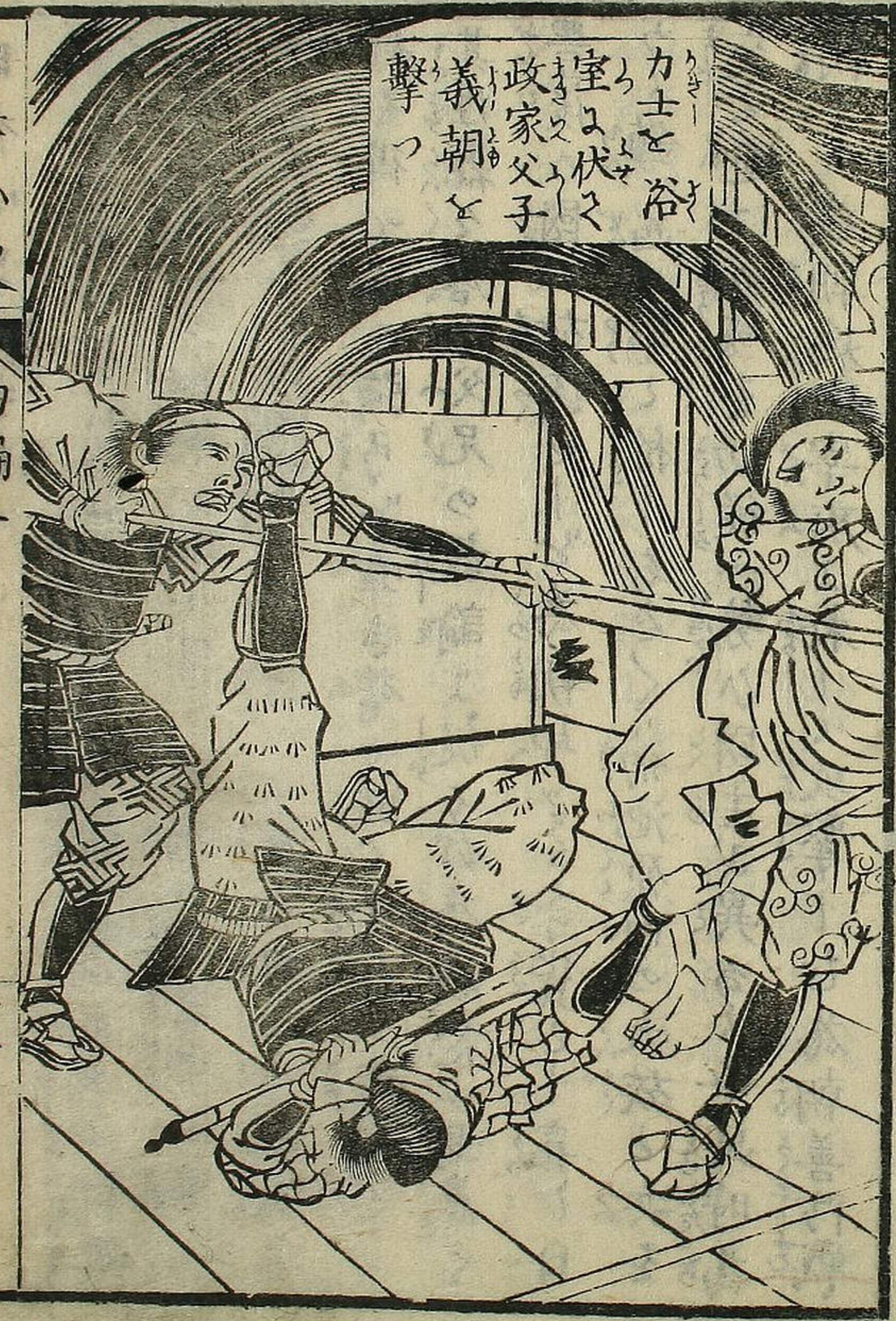
大将家衡も遁れ出て道より遂に撃れり武衡も
 未練あり池水の中は潜れ居りて遂に義家も捕へら
 せ孰も頭を刎て其黨與四十餘人を誅し獄門も梟首
 して奥羽悉く夷ぎたり世之を後三年の役とりし
 鳥羽帝の朝を経て崇徳天皇の御宇長承元年秋八月
 鳥羽上皇得長壽院を建立し平忠盛と作事奉行と
 せし此年功を竣し其その功勞を賞せし但馬守も
 除し昇殿を聽さる忠盛は正盛の子も白河鳥羽の
 二上皇天子の父を上皇といふは事へ寵遇殊も厚く

白河上皇の夜祇園社の傍る愛妾が許し忠盛一人
 召俱して潜り行幸し王ふ折雨風烈しき闇の夜の咫
 尺も分ぬ行途より頭髮逆立ち夜叉の如き異形の妖
 怪見え隠れし此方を指て来る様子扱とて妖怪とぞん
 られ疾正躰をと忠盛が跳り蒐つて後よりかの妖怪
 が襟髪掴み無手とをりふ引捕へよく見とと思ひ
 きや該堂守の老僧が神前も御燈を献せんとも麥稗
 を束ねて笠も代え之を頭も戴きて手も手燭を提げ
 雨も燈火消されと吹るが歩と来るもぞ忠盛笑

ツて放ち遣ぬ上皇（孝和）の膽勇（たみゆう）と深く感（あは）れま（ま）く寵遇（ちゆうぐ）
 せしむ一ゆゑ這回（このか）の榮轉（さか）を（ま）か（ら）る故（ゆゑ）とぞ知（し）られたり
 爰（こゝ）は不測（ふそく）の騷亂（さうらん）と挽起（ひきおこ）したる事（こと）の原素（もと）と尋（たず）ねるよ
 鳥羽上皇（とりは）（先帝（せんてい））の寵姫（ちゆうき）美福門院皇子（みふくもんいんこうし）體仁（たいにん）を生（う）む崇徳（たうとく）
 帝（てい）の養太子（やうたいし）とふ一年（いちねん）僅（まじ）く四歳（よんざい）にして帝位（ていゐ）を踐（ふ）きたま（ま）
 之（これ）と近衛天皇（このゑてんかう）と（い）つ（た）い（に）在位（ざいゐ）三年（さんねん）にして崩御（ほうご）なり崇徳上（たうとくじやう）
 皇復（かうふく）ひ帝位（ていゐ）を踐（ふ）んと（し）依希（よき）ひ崇徳（たうとく）の皇子（こうし）重仁（じゆうにん）も又賢（けん）
 者（もの）の聞（き）えありて此君（このきみ）とを讓（あ）りて受（う）て然（しか）る（と）と中外望（ちゆうがいのぞ）と
 を属（ぞく）するふも関（かん）せざる實（じつ）は恐（おそ）る（と）ま（い）女謁（にょてつ）内奏（ないそう）貴賤（きせん）尊卑（そんひ）

賢愚無差別婦人（けんぐむむべつぶつにん）は迷（ま）ふ（と）事（こと）と起（おこ）ま（し）る浅後（あさき）の皇（こう）一（いつ）次（じ）
 第（だい）して美福（みふく）の密（ひそ）り（し）鳥羽法皇（とりはほうかう）を勸（すす）め崇徳（たうとく）の皇太弟（こうたいてい）
 雅仁（みやにん）を立て位（ゐ）は即（す）ち（に）是（こゝ）を後白河帝（ごしろくわてい）と（し）ま（し）朝野駭（てうやが）
 然（しか）其措置（そのそち）を（ま）み（る）依世情（よせじやう）あ（ま）く（と）穂（ほ）り（あ）る（と）崇徳（たうとく）の
 深く憤（い）り（し）左大臣藤原頼長（さだ）と謀（ま）り事（こと）を（ま）り（し）る（と）今（いま）て
 り（し）保元元年（ほうげんげん）秋七月（あきしちがつ）鳥羽法皇崩御（とりはほうかうほうご）なりた（し）る機（き）は乘（の）
 ド崇徳上皇（たうとくじやう）遂（つひ）は兵（へい）と（ま）り（し）て白河殿（しろくわてん）の抛（な）り（し）源為義（げんためぎ）を召（ま）
 したま（し）る為義（ためぎ）の義親（よちち）の子（こ）なりて八幡太郎義家（やちばんたうらうよしか）を養（やしな）ひ
 れ美家卒（よしかす）する（と）及（およ）んで直（ただ）に宗家（そうけ）と相續（さうぞく）し文武兼備（ぶんぶけんぱい）の良將（りやうしやう）は

力士と浴
室に伏す
政家父子
義朝と
撃つ



て二十三人の子あり其長子を義朝といひ武畧才幹衆
 勝孫吳が兵法を胸に習ひ百戦百勝善戦ふ第八
 子を為朝といひ天質よりて左の手長さ事二寸射術よ
 妙を得て常は強弓と牽き膂力能く千斤の鼎を拳く
 其性磊々落落父兄の教諭に従ふが為義怒り且患ふ
 豊後の國へ放逐せしと為朝却つて奇貨とし喜ひ自
 ゝ鎮西八郎と稱し名をく菊池原田の大族と兵を
 交え遂は九國を切従へ勢ひ國主は異あり此時為
 朝十五歳朝廷太宰府に勅して攻撃しむ為朝善防戦

るまがゆゑに寄手の志をく惱まされ遂は勝を得る能
 なる父為義よの罪に坐せしは官を解ししと聞き
 為朝甚く悔悟なり父を罪に陥いる不孝之より大なる
 るなりと從臣須藤家季等二十八人を率ゐる京都に至り
 て閑居し謹んで罪を待て在りが這回上皇兵を挙げ父
 為義を召さしむる父と俱は為朝も白河殿へ馳加るる
 亂離の世とい言るが親子兄弟各々方向を異ふ
 長子義朝の父は離れ朝廷の召に應じ一族源三位頼
 政等を率ゐて平清盛と俱は禁内へ馳加り朝廷を

守護一奉つる去程は白河殿に馳加るり武臣の面々左大臣頼長を謀主とる軍議區々未だ決せむ為朝席を進と出で毅勇ましく議して曰く寡を以て衆を撃つに夜攻を蒐るよ如そのなり臣請今夜急に起り敵の不備は押寄て高松殿を取圍之三方は火を放ち一方より一と攻撃の勝を得んと疑ひる敵中善戦ふ者の臣が兄義朝のものと一矢は射倒さんこと日頃の腕は覚えらる其餘清盛等が如き取るも足ぬ木葉武者睨と殺せいと容易にかくまはる時天

ぬ間は大事の忽地成就せんと憚る色なく凛々と勇氣を含んで演舌るまは頼長聞て冷笑ひ血氣は迅る暴虎の建築その皆野人匹夫の私闘而帝國を争ふひたまふ堂々の陣は用ひざり南都の僧兵召は應ト来る成侯て戦ふも未だ敢て晩まよらざると其議を嘗て採用せむ為義も又策を建て此地を立退き南都は走り宇治川の流まよ扱れり戦えん若敗るべ関東は逃と諸源を語らひ再拳を謀らん是一拳両全の策なりと詞を盡して論ぜりうと又頼長は擯斥され此議も空

一く画餅とありぬ為朝退き嘆トて曰く止まんく事
 老たり家兄の謀畧他より我為所を行ふべしと
 先見違を禁内より関白藤原忠通以下諸將聚議未
 だ決せむ勅諭に因て義朝を階下より召され其計畧を
 垂問せらる語に應て義朝のさん候ふ戦ひの勝負を
 一挙に決まらる夜攻を以て第一と先んぶる時を
 人を制し後るれを制せらる敵兵未だ加らざるうち
 一時も早く撃よ如むと符節を合する兄弟が優劣
 らぬ軍の進退朝議義朝の策に決し即夜選兵四百人

以て平清盛と二手に分と直し白河殿を襲ひ撃つ豫
 て期したる為義父子源家は傳り八個の甲を各々分
 ちて一着なり敵なきも源家の嫡流骨肉同胞恩愛
 の羈ハ断ぬ義朝はハツの内ある一具の甲を贈り届く
 る一世の浮沈為朝軀幹八尺有餘かの甲を服する能
 る他甲は戎装威厳しく手勢二十八人を將て白河殿
 の西門を守り寄手遅しと待掛たり其餘の將士も部
 界より闇みを見り源氏の白旗列を正し二十餘
 流見兵僅うは八百餘騎四手は派きて守り居る時稍

初更よる又また近ちかき頃ころ兩軍りゅうぐん一度いちど鯨くじら般ばんを拳こぶしげ西門せいもん目掛めかけて寄よ来るき寄手よせての大將おほしやう平清盛へいせい同どうトク重盛じゆうせい父子ふち諸共しよとも一ひと諸兵しよへいを指揮しきし射掛やかくる矢や玉たま多おほ雨あめの如ごとく此時ふと生なてを為な朝あそを鎮しづまり返かへりて敵兵てきへいを門かどの傍そばまで誘あそび寄よせ時機ときの好よしと兩扉りゆうひを左右さゆうよさらつと押開おしひらき宛然さまじう津浪つなみの沸わが如ごとく喚あき叫こゑんで出いで戦たたかふ為な朝あそ弓ゆみよ矢交やまて飄ひらと放はなてバ過あまさは先ま進すすみ敵てきの部將ぶしやう伊東いとう五ごの胸むねを射貫やぶきて其その弟あに伊東いとう六むの鎧よろいの袖そでを縫ぬりたる此勢このいきほひは辟易へきえきし寄よ手ての後のちへ引退ひきひく入換いりかつて新あら手ての大將おほしやう義朝ぎしやう自みづから進すすむ

撃うつ敵てきの大勢おほいきほ味方あつちハ主従しゆじゆう僅わずかよ二十八にじゅうはち騎き縦横じゆうけい無盡むじん又また暴廻あまたる其勢そのいきほひ猛虎まうこの群羊ぐんやうを驅かが如ごとく當あり兼あたる義朝ぎしやうの馬うまを蹴立けりたて逃走たうそう射止やどるとの容易やすかれと兄あにと思おもへを為な朝あその其荒膽そのあらかむを挫くたきとんと放はなつ矢先やまよ義朝ぎしやうが曾そとの鏃やぶを射削やぶりて莊嚴院しやうげんの門扇かどを碎くだるるもつと多おほく従兵じゆうへい二十二にじふに騎きの乱軍らんぐんのうちよ戦死せんじして餘あまを処ところる六騎むつきのみかりたれども為朝あその勇氣ゆき以前いぜんよ十倍じふばいも尚なほも屈かせむ守まもり居ゐる父ちち為義あそも自餘みづかの諸子しよこと善よ

拒ぎ戦ふものうゝ勝負も未だ定らるるぞやう程
 又明近く東の天も白む頃寄手の大将義朝清盛各々
 兵を部署ふし折し毛烈しき風よ乗ト風上よりトそ
 火を縦てを見るく黒烟天よ漲りちや宮殿へ燃移る
 猛火よ便りを得る兵卒追風を背よ義朝清盛全軍
 を指揮して押寄り

通俗
 日本小史初編上終

010190512830

